

寓意と史実

— 阮籍の四言「詠懷詩」をめぐって —

沼口 勝

はじめに

詩人が自らと何らかの関わりをもつ、ある社会上・政治上の人物・事件・事象などを主題として取り上げようとするとき、しばしば寓意 (allegory) の手法を用いることがある。これは古今東西を問わずその本質は変わらないものらしい。ある「文学要語辞典」は次のように解説している。

「ある主題 A を述べるさいに、他の主題 B を使って類似性を適切に暗示しながら、その主題を示したり、風刺する表現法をいう。一面から見れば METAPHOR をあらゆる関係において具現したものが allegory である。(略)」(福原麟太郎・吉田正俊編『文学要語辞典』研究社、昭和五十三年五月改訂増補版)

これに従えば、もし説者がその寓意を読み解こうとするならば、主題 B の暗示する類似性をたどり、用いている暗

喩の意味するところを探りつつ主題 A の把握へと進まねばならない。これは知的困難さを伴う、しかしそれだけに楽しさを享受することのできる作業といえよう。

さて、中国文学において、寓意の作品はあまた数えることができるであろうが、その代表として竹林七賢の一人魏の阮籍(字、嗣宗 二一〇～二六三)の四言の「詠懷詩」十三首がある。阮籍は後漢末に建安七子の一人である阮瑀(字、元瑜 ？～二二二)の子として生まれ、文帝曹丕、明帝曹叡の時代に少・青年期を過ごし、魏朝が傾き始める斉王曹芳、そして権臣の司馬氏が実権を掌握する高貴郷公曹髦・元帝曹奂の魏朝の最末期を、司馬氏の勢力下にその壮・老年期を送った人であった。曹魏から司馬晋へと権力が移る。それにつれて時勢と人の生き方が変わる。そのさまを阮籍は熟視し、慷慨苦惱し、また達観しようと試みた。彼の八十二首の五言「詠懷詩」と四言「詠懷詩」はそ

ここに誕生した。この両者を比較してみると、五言「詠懐詩」が連作として作品数が多く、制作時期の推定が困難で、作者の複雑な思想感情を包含し、意味が捉えがたいのに比し、四言「詠懐詩」は作品数も少なく、制作時期もほぼ限定され、五言に比して素朴な詩形であることから内容も比較的把握しやすい。

いま、四言「詠懐詩」(十三首)の連作中の(其一)の詩を取り上げて、その寓意表現からある特定の歴史記載の事象、いわゆる史実へとむすぶ過程を明らかにする試みをはじめたい。この詩について、筆者はすでに「なにか言及しているが、今回あらためて検討を加えた結果、その寓意表現の核心にこれまでより近づき得たのではないかと思う。またそれにより、四言「詠懐詩」の連作全体の内容上および制作時期について問題提起することができるのではないかと思う。なお論述の便宜上、旧稿の内容をくりかえしたところがあることをお許しいただきたい。

一

まず四言「詠懐詩」(其一)の詩を掲げよう。

天地網縊

天地は網縊として

元精代序

元精は代序す

清陽曜靈

清陽は靈を曜かし

和風容與

和風容与たり

明月映天

明月 天に映じ

甘露被宇

甘露 宇を被ふ

翦鬱高松

翦鬱たる高松

猗那長楚

猗那たる長楚

草蟲哀鳴

草虫は哀鳴するに

鷓鴣振羽

鷓鴣は羽を振るふよ

感時興思

時に感じて思ひを興し

企首延佇

首を企げてくびを延ばし佇む

於赫帝朝

於赫なるかなわが帝朝

伊衡作輔

伊衡 輔を作す

才非允文

わが才 允に文あるに非ず

器非經武

わが器 武を経むるに非ず

適彼沉湘

彼の沉と湘とに適き

託分漁夫

分を漁夫に託さん

優哉游哉

優なる哉 游なる哉

爰居爰處

爰に居り 爰に処らん

る。

冒頭から第六句までが第一段落(起)。その内容を直訳

的に説明すると、天地の陰陽の二気がもつれ合い一つになり（天地網緼）、天の精気である日月星辰雷電風雨などが順次交代し（元精代序）、清らかで明るい日光が輝き（清陽曜靈）、和風がおだやかに吹き（和風容與）、明月が空を照らし（明月映天）、甘露が空いっぱいには被う（甘露被宇）という。

次の第七句からの四句が第二段落（承）で、各句ともに『詩経』の詩篇を典拠とする。その内容を述べると、盛んに茂る高い松（翦鬱高松）、たおやかないららぐさ（猗那長楚）、くさむしは哀しげに鳴き（草蟲哀鳴）、うぐいすは羽を振るわせて飛ぶ（鷓鴣振羽）という。

第十一句からの四句が第三段落（転）で、ここでは詩人が時世に感慨を懐き、頭をあげ何かを求め展望すると（感時興思、企首延佇）、盛んなるわが魏朝は、伊尹のごときお方が輔佐されているのであった（於赫帝朝、伊衡作輔）という。

第十五句から末尾までの六句が第四段落（結）。詩人はいう、文武の才器を具えないおのれは、かの屈原が沅湘のほとりに行き、漁夫の舟に身を託したのに倣いたい（才非允文、託分漁夫）、ゆつたりとおちついて、ここに居ることとしよう（優哉游哉、爰居爰處）と。

以上が一首の表面上の意味である。しかし、これだけではこの詩がなにを言わんとしているのか、その真意が不明瞭である。ことに第二段落の四句が意味不明に近い。これはこの四句がそれぞれ『詩経』の詩篇を典拠とすることによるのである。そしてこの詩の寓意の核心がここにあると思われる。そこでまずこの四句の検討からはじめたい。

ところで、すでに上述の旧稿において指摘したところであるが、阮籍の『詩経』の用法は、古文家の毛詩ではなく、^②今文家の三家詩のうちの魯詩によっているのである。したがって、当該の詩句の典拠とする『詩経』の詩篇や詩句に魯詩の説が遺存しているときには、それを適用するのが妥当といえよう。また、魯詩説が遺存していなくとも、それが他の齊詩・韓詩、そして毛詩の説と同じであることも往々にしてあり得るから、そうした場合は他の詩説によることとする。

さて、まず第二段落第七句「翦鬱高松」については、民^③国の黄節は『詩経』が典拠であることを指摘していないが、実は鄭風の「山有扶蘇」の第二章「山に橋松有り、隰^④に游龍有り、子充を見ず、乃ち狡童を見る」を典拠とするようである。「山有扶蘇」の詩についての三家詩説は遺存しないが、毛序は昭公姬忽の人を見る目のないことを刺譏

する歌とし、鄭箋は「山有橋松、隰有游龍」の二句について、「橋松の山上に在るは、忽の大臣に恩沢無きに喩ふるなり、紅草の枝葉を隰中に放縱するは、忽の小臣に聰恣するに喩へ、此れ又其の臣を養ふに顛倒して其の所を失ふを言ふなり」と説く。紅草は、馬藜（和名いぬたで）。王先謙によれば、この詩に関しては齊・魯・毛各家の文義は並びに同じいという⁴⁾。これを要するに、「山有扶蘇」の「橋（喬）松」は、昭公姫忽を指すのであり、これを典拠とする「翦鬱高松」の句においても、昭公のような君主を象徴する表現として用いているのであろう⁵⁾。

次に第八句「猗那長楚」の解釈であるが、この句は檜風の「隰有蓂楚」の第一章に、「隰に蓂楚有り、猗儺たる其の枝、天にして沃沃たり、子の知る無きを樂しむ」というのを典拠とするであろう（黄節も同じ）。この詩についても三家詩の遺説はなく、ただ毛序の、国人がその君の淫恣を疾んで情慾なき者を思う歌とする説があるだけである。そして、毛伝は「興なり、蓂楚は、銚弋なり、猗儺は、柔順なり」といい、鄭箋はこれを「銚弋の性、始め生ずるや正直、其の長大なるに及べば、則ち其の枝猗儺として柔順、妄りに草木に尋蔓せず、興とは、人少くして端慤なれば則ち長大にして情慾無きに喩ふ」と敷衍する。銚弋は、羊桃

（和名いららぐさ）。端慤は、正しくて誠のあること。ところで陳喬樞は魯詩説として、「蓂楚は、銚弋なり」（「釈草」の文）「知は、匹なり」（「釈詁」の文）の二箇条の語釈を挙げており、これらは毛伝・鄭箋と一致するから、この詩に関しても魯・毛二家詩間に解釈上さしたる差違がなかつたものと見なすことができる。これを要するに、「隰有蓂楚」の詩の「蓂楚」は、正しく誠実で淫らなところのない人を象徴する語であり、阮籍の「猗那長楚」の句も、同様な解釈に従うものと考ええる。

以上の検討によれば、阮詩の第七・八句は、翦鬱として茂る高松のごとき君で、それはまた隰に生える蓂楚のごとき、正しく誠実で淫らなところのない人格を暗喩する表現と見なすことができよう。それでは、これを受ける第九・十句「草蟲哀鳴、鷓鴣振羽」は、『詩経』のいかなる篇を典拠とし、そしていかなる意を詠うものであろうか。それを次に検討したい。

まず、第九句の「草蟲」の語の典拠としては、召南の「草蟲」と小雅の「出車」の二篇をその検討の対象に挙げることができる。「草蟲」の詩の第一章と「出車」の詩の第五章の文とは、五句にわたって同じ文、すなわち「嘒嘒たる草蟲、趨趨たる阜蟲、未だ君子を見ず、憂心忡忡た

り、(略) 我が心則ち降る」を重ねており、酷似した表現をもつ。左に両者をその原文をもって示そう。

嘒嘒草蟲、趨趨阜蟲、未見君子、憂心忡忡、亦既見止、亦既覯止、我心則降。(「草蟲」)

嘒嘒草蟲、趨趨阜蟲、未見君子、憂心忡忡、既見君子、我心則降、赫赫南仲、薄伐西戎。(「出車」)

両者のうちのいずれが該当する典拠であるのかは、各家の詩説の検討を経なければならぬのであるが、詳細については旧稿に譲り、いまは結論に相当する内容のみを述べることとする。

「草蟲」の詩について、毛序は、「草蟲は、大夫の妻、能く礼を以て自ら防ぐなり」という。毛伝は、「嘒嘒草蟲、趨趨阜蟲」の句につき、「興なり、……卿大夫の妻、礼を待って行き、君子に随従す」と説く。また鄭箋の解釈は、「草蟲鳴けば、阜蟲躍りて之に従ふ、異種なれども同類なり、猶ほ男女の嘉時、礼を以て相求め呼ぶがごとし」という。要するに、毛序・毛伝・鄭箋の古文家の解釈は、この二句を男女の嘉会にも礼を忘れぬことを象徴する「興」の表現と捉えているのである。ところが、陳喬樞が魯詩説として挙げる劉向の『説苑』君道篇の文、それは魯の哀公に對えた孔子のことばであるが、そこでは次のようにいう。

惡道を惡むこと甚だしきこと能はざれば、則ち善道を好むこと甚だしきこと能はず、……詩に云へらく、「未見君子、憂心惓惓、亦既見止、亦既覯止、我心則降」(第二章の文)と、詩人の善道を好むことの甚だしきや、此くの如しと。

陳喬樞はこの文に拠り、魯詩の説と毛詩の説とは異なることを指摘する。私見によれば、「草蟲」の詩義を、君子の善道を好み惡道を惡むにあるとする魯詩説は、阮詩の「草蟲哀鳴」の典拠として最も相応しいとすることができ(黄節は「嘒嘒草蟲、趨趨阜蟲」の二句だけを示している)ので、「草蟲」「出車」のいずれの篇を典拠としているのか不明)すなわち、「草蟲」がなにゆえに「哀鳴」するかといえば、「未見君子、憂心忡忡」のゆえにであり、その君子とは、善を善とし惡を惡とする人を意味するものである。この解釈は、「出車」の詩に對する諸説が、帰選した將帥を慰勞する歌(毛序)、將帥と兵卒とでは戰役中は一心同体で何事も同じ扱いであるが、帰選して慰勞するときには尊卑の別を設けることをいう歌(鄭箋)、周の宣王が戎狄征伐の実を挙げた功を美する歌(『漢書』匈奴伝一齊詩説)、そして周の宣王が南仲吉甫に獵狝を攘い、蛮荊を威圧することを命じ、吉甫が凱旋して祝宴をもつたことを

いう歌（蔡邕の「難夏育諸伐鮮卑議文」―魯詩説、また鄭箋）などとするのと比較して、阮詩の典拠とするのにより相応しいであろう。続いて第十句の検討に入ろう。

第十句「鷓鴣振羽」と類似する句をもつ『詩経』の詩篇を求めるならば、「出車」の詩の第六章の「倉庚啾啾、采芣芣」¹という句、豳風の「七月」の詩の第二章の「春日載陽、有鳴倉庚」という句、そして同じく豳風の「東山」の詩の第四章の「倉庚于飛、熠燿其羽」という句をもつ三篇であろう。そしてこれらの中で表現の類似という点から見て、「東山」の詩がその典拠として最も相応しいと判断される（黄節も同じ）。「東山」の第四章の文を次に示す。

我徂東山、惓惓不歸、我來自東、零雨其濛、倉庚于飛、熠燿其羽、之子于歸、皇駁其馬、親結其縞、九十其儀、其新孔嘉、其舊如之何。

（我東山に徂きしより、惓惓として歸らず、我東より来たれば、零雨其れ濛たり、倉庚ここに飛び、熠燿たる其の羽、之の子ここに歸ぐ、其の馬を皇駁にす、親は其の縞¹を結び、其の儀を九十にす、其の新たなるは孔だ嘉し、其の旧しき之を如何せん。）

「東山」の詩について、毛序・鄭注ともに周公が殷の遺民とこれを治める武庚、管叔、蔡叔らのいわゆる三監を誅

滅しまたは放逐し、また淮夷の叛乱を討伐し、三年後に凱旋することを詠った歌とする。その第四章の「倉庚于飛、熠燿其羽」の句についての鄭箋は次のようにいう。

倉庚仲春にして鳴く、嫁取の候なり、熠燿たる其の羽、羽の鮮明なるなり、婦士始めて行くの時、新たに昏礼に合たる、今還る、故に極めて其の情を序し、以て之を樂しむ。

すなわち、遠征に発つ時、新妻を残して行つた兵士が帰還に際して妻と会える喜びを詠う句であると、鄭箋はいう。羽を鮮明に輝かして飛ぶ倉庚は、凱旋する兵士の喜びの感情を象徴する表現である。阮詩の「鷓鴣振羽」が「東山」の詩のこの二句に拠るものとすれば、当然その句もまた凱旋する兵士の喜びを象徴する表現と解しなければなるまい。ここに至つて漸く「草蟲哀鳴、鷓鴣振羽」の二句の「興」の所在を解くことができた、というべきであろう。すなわち、一方は善を善とし悪を悪とする君子を見ることができないのを憂え、草蟲が哀鳴するようにひそかに悲しむ人々の姿と、他方羽を輝かして飛ぶ鷓鴣に象徴される凱旋する兵士の歓びの姿がここに詠われているのである。

これを要するに、第二段落四句の象徴する内容は、正しく誠実で清潔な君主の存在と、善悪をはつきりと弁別する

判断力の持ち主であるような君子を失い悲しむ人々、それと対照的にその戦争から凱旋した兵士の歓びの姿である。

二

さて、四言「詠懷詩」(其一)の第二段落で暗示するのは、いったいいかなる事件と人物とであろうか。まず論述の便宜上、「草蟲哀鳴、鷓鴣振羽」という対句について取りあげることとしたい。筆者はその事件を、旧稿において甘露三年(二五八)二月に鎮圧された、淮南に拠る諸葛誕の叛乱を指すものであろうと推測したが、その判断はいまも変わらない。次に諸葛誕の乱にいたるまでの顛末を概観しよう。

魏末の嘉平元年(二四九)正月、大將軍曹爽の一派(何晏・鄧颺・李勝など)が司馬懿により誅滅され、実権は司馬氏に移る。同三年(二五一)、帝を廢し、楚王彪を立てようと謀ったことが露頭し、大尉の王淩が自殺、彪が死を賜る。同六年(二五四)二月、李豊・張緝が夏侯玄を大將軍にしようと謀り、事が發覺して皆誅に伏す。同年九月、明帝を継いだ第三代の天子の曹芳(齊王)が司馬師により廢された。女色に耽り、日々倡優と醜虐をほしきままにし、万機に親しまずという理由であつた。そして、正元二年

(二五五)正月、母丘儉、文欽の乱があり、司馬師により鎮圧される。母丘儉は夏侯玄、李豊と親しく、彼らの誅滅により、おのれの身にも危険の迫る不安を抱いていたのである。諸葛誕は夏侯玄・鄧颺らと親交があつたから、王淩・母丘儉が夷滅されたことに不安を抱き、死士を養い、淮水に臨んで築城し、十万の兵力増強を求めたりし、ひそかに淮南を保有せんと欲したのであつた。司馬昭は諸葛誕の謀反を疑い、都に召還させるため司空に昇進させたのであつた。

『魏書』「三少帝紀」の記載に次のようにいう。

(甘露二年)夏四月、甲子、征東大將軍諸葛誕を以て司空となす。乙亥、諸葛誕徴に就かず、兵を發して反し、揚州刺史樂綝を殺す。丁丑、詔して曰く「諸葛誕凶乱を造爲し、揚州を盪覆す。(略)今宣皇太后と朕と暫く共に戎に臨み、速やかに醜虜を定め、時に東夏を寧んぜん」と。

三年春二月、大將軍司馬文王、壽春城を陥れ、諸葛誕を斬る。三月、詔して曰く「(略)大將軍親ら六戎を総べ、營は丘頭に拠り、内群凶を夷げ、外寇虜を殄し、功兆民を濟ひ、声四海に振るふ。克敵の地宜しく令名有るべし、其れ丘頭を改め武丘となし、武を以て乱を平らぐるを明

らかにし、後世忘れざる、また京観一邑の義なり」と。
『魏書』卷二十八「諸葛誕伝」とその裴松之注によれば、
諸葛誕の人物に対する世評には注目すべきものが認められ
る。その二三を挙げてみよう。

初めて尚書郎を以て祭陽の令となったとき、僕射の杜畿
と船遊びし、風にあい覆没し、二人ともに溺れた。虎賁
（宿衛の直）が誕を救おうとすると、「先に杜侯を救え」と
いい、岸に漂着し、一度は息絶えてまた蘇った。吏部郎と
なつたとき、人事上の囑託があると、その推薦の言を明ら
かにしてこれを用い、のち当否の議があれば、公にその得
失を議論して褒貶を定めたので、以後群僚は推薦を慎むよ
うになつた。誕が斬殺されて、その麾下数百人が降伏せず
斬られたが、皆「諸葛公のために死して恨みず」といつた
という。その人心を得ていたことがこれでわかる。

以上のことから、阮詩の典拠表現の内容と諸葛誕の乱お
よび諸葛誕の人物との関連とについて検討を加えたい。

まず、「鷓鴣振羽」の句の典拠である幽風「東山」の詩が、
周公の東征、すなわち三監および淮夷の叛乱を詠うものと
されていること、そしてその凱旋が倉庚の鳴き飛ぶ仲春二
月であると詠うことで、諸葛誕の乱を鎮圧した司馬昭率い
る朝廷軍の東征と軌を一にする。

句の順序は逆になるが、「草蟲哀鳴」の典拠と推測され
る召南「草蟲」についての魯詩説を用いた解釈、すなわち、
草蟲ならぬ人々が哀鳴するのは、善を善とし悪を悪とする
君子を未だ見ないがためであるというその君子の像と、諸
葛誕その人の像と重なるのではないだろうか。

そしてこれを基に、さらに前の二句の「高松」と「裒楚」
により象徴された君主は誰かということになると、当然そ
れは高貴郷侯曹髦その人ということになるであろう。「三
少帝紀」の記載中に明記するように、天子として宣皇太后
とともに諸葛誕の反乱軍討伐に親征していることが、その
関連を物語るからである。高貴郷公髦は、字は彥士、文帝
丕の孫、東海定王霖の子、正始五年（二四四）、郊泉の高
貴郷公に封ぜられた。少くして好學、夙成。嘉平六年
（二五四）十月、齊王の廢されたあとを承けて即位。「三少
帝紀」の裴松之注に引く『魏氏春秋』に、即位のあと、司
馬師が「上はいかなる主ぞ」と問うたのに対し、鍾會が
「才は陳思に同じく、武は太祖に類す」と答えたのである。
また太学に幸し、諸儒と易・尚書・礼記について問答した
ことは広く知られている。このように朝野の期待を一身に
なう存在であったが、甘露五年（二六〇）五月、「司馬
昭の心は、路人知る所なり。吾坐して廢辱を受くる能はず、

今日当に卿らと自ら之を討つべし」といい、尚書王経らと
僮僕数百を率い、打つて出て憤死したのであった（裴松之
注引『魏書春秋』）。

この高貴郷公がその誕生に際しての禎祥について自ら叙
した文を裴松之注は引く。次に示す。

昔帝王の生まるるや、或いは禎祥有り、蓋し神異を彰
顯する所以なり。惟れ予小子、支胤末流なるに、謬りて
靈祇の相祐くる所と爲るなり、豈に敢へて自ら前哲に比
せんや、聊か記録して以て後世に示さん。その辞に曰く、
惟れ正始三年九月辛未の朔、二十五日乙未直成、予生ま
る。時に于けるや、天氣清明にして、日月輝光し、爰に
黃氣有り、堂に煙燼し、室宅を照曜し、其の色煌煌たり。
相して之を論じて曰く、未は土たり、魏の行なり、厥の
日直成、嘉名に應ずるなり、烟燼の氣は、神の精なり、
災無く害無きは、神靈を蒙るなり。齊王甲からず、厥の
度を顛覆す、群公予を受け、祚皇を紹繼せしむ。眇眇の
身を以て、質性頑固にして、未だ道を渉る能はざるに、
而かも大路に遵ふ、深きに臨み氷を履むがごとく、涕泗
し憂懼す。古人云へる有り、懼るれば則ち亡びずと、伊
れ予小子、愚んぞ敢へて怠荒せんや。庶はくは忝辱せず、
永く烝嘗を奉らんことを。（帝集載帝自敘始生禎祥曰）

ここに記載する、高貴郷公自らがいう生誕時に現れた禎
祥と、阮詩の冒頭五句の表現によつて示された現象と、そ
の類似に注目したい。なお第六句「甘露被宇」に類する瑞
兆は、「正元二年（二五五）五月、鄴と上洛に並びに甘露
降る。夏六月丙午、改元して甘露と爲す」（三少帝紀）と
して記載する。高貴郷公に関する記載であるだけに、詩句
との関連が考慮されよう。

このように阮籍は高貴郷公誕生時の禎祥とその在位中の
瑞祥を写すことにより、その時世を暗示し、そして続く
「翁鬱高松、猗那長楚」の二句により、その人を象徴させ
たのではないだろうか。

以上を要するに、この詩は第二段落の『詩経』の詩篇の
句とその詩説を用いた箇所が寓意の核心をなし、司馬昭の
圧力を受け、叛乱鎮圧のために親征した高貴郷公と、当の
叛乱の主諸葛誕とを暗喩する表現を解明してはじめて、第
一段落が高貴郷公の時世を表していることに気づくのであ
る。さらにこれを受けて第三段落は、眼前の凱旋を欲呼す
る京師の景に憂悲する詩人が、思いを募らせ、慰めを希求
して展望を試みることをいうが、しかし、阮籍がそこに見
たものは、殷の伊尹のような賢臣が補佐をなす赫赫たるわ
が帝朝である、とことばでは賛美してみせるものの、その

実は司馬氏の権勢の下で氣息奄奄たる末期の朝廷と、それと対照をなす饗奪者司馬氏との姿であった。作者は、おのれには文武の才器がないと謙遜を装いつつ、司馬氏への加担を避けることを言外におわせる。そして、末尾四句に表明するごとく、隱遁への道を志向してこの詩を結ぶのである。

三

前章の考察により、四言「詠懷詩」〈其一〉の「翁鬱高松、猗那長楚」の句が、高貴郷公髦を指すということとなった。そうだとすると、五言「詠懷詩」〈其四十九〉の「沢中に喬松生ず、万世も未だ期す可からず」の句も、鄭風の「山有扶蘇」の「山有橋松、隰有游龍、不見子充、乃見狡童」の文を典拠として（黄節は典拠としている）、同じく高貴郷公を指すとするのも、あながち無理な推測とはいえないであろう。〈其四十九〉の詩を次に掲げる。

歩遊三衢旁　　歩して三衢の旁に遊べば
惆悵念所思　　惆悵して思ふ所を念ふ
豈爲今朝見　　豈に今朝に見ると為さんや
恍惚誠有之　　恍惚として誠にこれ有り

澤中生喬松

沢中に喬松生ず

萬世未可期　　万世未だ期す可からず
高鳥摩天飛　　高鳥　天を摩して飛ぶ
凌雲共遊嬉　　雲を凌ぎて共に遊嬉せん
豈有孤行士　　豈に孤行の士有らんや
垂涕悲故事　　涕を垂れて故時を悲しめり

筆者はかつてこの詩についての解釈を、四言「詠懷詩」〈其一〉と関連させて述べたことがある。いまその解釈を、簡潔に述べれば次のようである。すなわち、首四句は、四方に通じる大道の傍らを歩むように、時世の岐路に生きるおのれは、悲嘆しつつ思慕するひとのことをじつと思いつづけている。そのひとを今朝見ることができるとは思いもしなかつた、だが、その姿はぼんやりと誠にそこにあるのだった。次の四句、その思うひとは、沢の中に生えた喬い松のように閉塞された運命を背負っているがために、万世経たとしてもそのすぐれた経世の才を現すことはできなかつたであろう。『詩經』小雅「苑柳」に「鳥有り高く飛ぶ、亦天に傳る」（第三章）といい、暴政に苦しむ人の苦痛不安から逃れたいという願いが詠われているが、おのれも天高く飛ぶ鳥となり、雲を超えて遊びたいものだ。末尾の二句は、「孤行の士」として独りわが生き方をつらぬきたいと願つても、それさえ許されぬ今の世を嘆き、涕を垂れて

故時を悲しむのである。

右の旧稿の解釈をいま改めるところがあるとすれば、「沢中に喬松生ず」というその喬松は、高貴郷公を暗示しており、したがって第二句の「所思」も同じ人を指しているかと解すべき点であろう。

また、いまひとつ気づいた点を記すと、後者の詩の「澤中生喬松」という秀抜な表現は、あるいは、高貴郷公を暗示する「鬱鬱高松、猗那長楚」（四言〈其一〉）の句の典拠となる「山有橋松、隈有游龍」という表現から発想したものかもしれないということである。そのように考える理由は、既出したが「山有扶蘇」の鄭箋に「橋松の山上に在るは（略）」といい、この「橋松」を山上にあるものとしている。阮籍は諸葛誕の乱の時期の高貴郷公に、まだいくばくかの未来あることを感じていたために、山上に生える「鬱鬱高松」と表現したのであった。しかしながら高貴郷公が叛乱して弑虐された後では、悪しき時世に天子となつたそのひとの不幸を、「澤中生喬松」と表現を変えて比喩したのではないであろうか。ちなみに、晋の左思（二五三？〜三〇七？）の「詠史詩」（八首）其二の冒頭の四言「鬱鬱たる淵底の松、離離たる山上の苗、彼の徑寸の莖を以て、此の百尺の条を蔭ぶ」（『文選』卷二十一所収）は、

門閥制度の壁に阻まれてその才能を発揮する機会のない寒門出身者の不幸な立場を表現したものとして知られているが、不条理な世に生まれついた英俊を低所に生じた松の木によつて暗喩する点において阮籍の詩句を襲うものといえよう。⁽⁸⁾

以上の考察に従うならば、四言「詠懷詩」〈其一〉の詩は、甘露三年（二五八）二月、諸葛誕の乱の鎮圧以後の作であり、五言「詠懷詩」〈其四十九〉の詩は、甘露五年（二六〇）五月己丑の高貴郷公の死以後の作であることになる。

『晋書』卷四十九「阮籍伝」によれば、籍は高貴郷公が即位すると関内公に封ぜられ、次いで散騎常侍に從つてゐる。『北堂書鈔』卷五十八に引く『竹林七賢伝』には、「高貴郷公、阮籍を以て散騎常侍となすも、その好みに非ざるなり」とする。これらの記載によれば、籍と高貴郷公との接点はあまりなかつたらしく推測される。むしろ、その前後、司馬懿とその子の司馬師の従事中郎となり、さらに師の後を継いだ司馬昭の庇護下にあつたことの方が、はるかに深い関係にあつたといえよう。しかし、「詠懷詩」という作品の世界から読み取ることができるのは、魏朝の天子の運命と司馬氏の専制に対する沈痛な詩人の嘆きである。

記載された史実と異相の世界がそこに横たわっているように思われる。

四言「詠懷詩」の連作中には、高貴郷公と関連すると推測される詩篇が多く存しているようである。いま〈其一〉の作が上述のように、高貴郷公と諸葛誕について詠うものであるとすると、その他の詩篇の寓意の解明に影響を及ぼすであろうと推測する。

注

(1) 左記の拙稿を参照されたい。

① 「阮籍と『詩経』——四言詠懷詩を例として——」

「中国文化 一九八五——漢文学会会報第四十三号——」

大塚漢文学会、昭和六十年六月

② 「黄節『阮步兵詠懷詩注補篇』・補遺」(「中国文化

一九八六——漢文学会会報第四十四号——) 大塚漢文学会、昭和六十一年六月

③ 「阮籍の四言「詠懷詩」について——その修辭的手法を中心として——」(「日本中国学会報」第三十八集、日

本中国学会、昭和六十一年十月)

④ 「阮籍『詠懷詩』管窺」(「高校通信・東書・国語」第二六七号(東京書籍、昭和六十一年十月)

(2) 注(1)の①を参照。

(3) 黄節註「阮步兵詠懷詩注補篇」(『阮步兵詠懷詩註』所収、

人民文学出版社、一九八四・北京)

(4) (6) (清) 王先謙撰『詩三家義集疏』上・下(中華書局出版、一九八七年二月)

(5) 「山有扶蘇」と同じ鄭風の「狡童」の詩について、「毛序」は、「刺忽也、不能與賢人圖事、權臣擅命也」といい、第一章首二句「彼狡童兮、不與我言兮」について「毛伝」が「昭公有壯狡之志」とし、「鄭箋」が「不與我言者、賢者欲與忽圖國之政事、而不能受之、故云然」としている。すなわち昭公姫忽が賢者と事を図らず、權臣(ここでは祭仲をいう)の專横を許したことを刺譏したとするのである。ここから高貴郷公が司馬氏の專横を止めることができなかったことを、作者阮籍は「山有橋松」の句を用いて暗喩したのである。なお、右の「壯狡之志」について清・胡承珙『毛詩後箋』は、「昭公志奮而所與圖者非其人、故惟有壯狡之志而闇于事機、終將及禍」と解釈する。注(1)の②の〈其三〉の〔注〕参照。

(7) 注(1)の④を参照。

(8) 左思については、興膳宏「左思と詠史詩」(「中國文學報」第二十一冊 京大中國文學會、一九六六年十月)に詳論がある。